

平成 28 年度

近畿大学附属小学校 学校評価 総括



近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

1. 平成28年度 学校方針

(1) 学園の建学精神

「実学教育」と「人格の陶冶」

(2) 学園の教育の目的

人に愛される人 信頼される人 尊敬される人 を育成することにある

(3) 本校の教育目標

自立した学習者の育成
社会に役立つ人材の育成

(4) 本校教育の三大方針（智・徳・体）

智をほりおこす「叡智教育」
心をみがく「道徳教育」
体をきたえる「健康教育」

(5) 本年度の学校経営方針

- ① ひとりひとりの児童を大切にす学校
- ② 信頼され、魅力ある学校
- ③ 子どもたちを中心に保護者・教職員がひとつになる学校

(6) 本年度の重点目標

- ① 定員確保に向けた児童および園児募集活動のさらなる充実を目指す
- ② 本校独自の幼小一貫教育を確立する
- ③ 児童・保護者対応への組織的な取り組み体制を確立する
- ④ 高い進路保障と柔軟な進路選択を確立する
- ⑤ ICT教育の一層の推進に取り組む
- ⑥ 学校行事および宿泊行事の充実を推進する
- ⑦ ビオトープの活用に向けて組織的な取り組みを推進する
- ⑧ 本校独自の英語教育の充実に取り組む
- ⑨ 指導要録等の電子化を再検討する
- ⑩ 保教会活動の検討を推進する

2. 近畿大学附属小学校 学校評価について

(1) 学校評価の目的

具体的な視点で重点化した年度目標や具体策の達成状況を把握し、評価サイクルの繰り返しによって、学校運営を改善し、教育の質の向上を図るとともに、学校関係者評価の実施や評価結果の公表等の取り組みを含めた、年間を通した評価活動を実施することにより、教育内容の充実を図る。

(2) 学校評価の種類

自己評価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケート・保教会運営委員アンケートによる結果
学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園副園長、近友会会長、保教会会長、校長、教頭により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。

(3) 評価基準

A：目標を上回って達成した B：目標どおり達成した C：取り組んだが達成できなかった
D：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった

3. 自己評価について

(1) 教職員による評価

<p>1. 学校経営の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 開かれた、信頼される学校づくりを進めるため、学校として、あるいは、学校やクラスとして抱えている課題に対し、組織的な学校運営を行う。 ○ 学校行事および宿泊行事の充実に向けて、本校の教育目標に沿った形で改善を図る。 ○ 学校便りや学級通信、ホームページ等を通じて家庭や入学希望者への情報発信を充実させると同時に、定員確保に向けた児童・園児募集活動を強化する。 		
評 価 項 目	取 り 組 む 内 容 (指 針)	達 成 状 況
①組織運営	初期対応に重点を置き、学年からフロアへと連携を深めたり、専科との連携を密にしたりする。定期の学年主任会だけでなく、必要に応じた柔軟に話し合いの機会を持つ。「報告・連絡・相談」を組織的に行う。	A
②学校行事の運営	学舎・学習旅行の実施場所と実施内容を全面的に見直し、系統性のある学舎・学習旅行を構築するとともに、学校行事や社会見学等の校外学習について、改善を進めていく。	A
③情報の発信・児童募集活動	学校での教育活動を広く公開、発信していくことで、在校生、保護者との信頼関係づくりに努める一方、開かれた学校づくりを通して、定員確保に向けた児童募集を展開する。	A
結 果 と 分 析		
<p>① フロア担当の位置付けを明確にし、より組織的に対応できるように改善が図られている。学年内で報告・連絡・相談を密に行い、フロア担当から、部長、教頭への組織的な対応ができています。また、保護者対応や特に配慮が必要な児童については、教育相談室長を中心に、組織的に対応することができた。</p> <p>② 今年度実施した学舎・学習旅行については、「総括」として各学年で来年度の引き継ぎ事項を含め、しおりやタイムテーブルの変更点等をまとめ、次年度の学年にスムーズに引き継ぐことができるように準備することができた。</p> <p>③ 学級通信や学校便り、専科からの通信、近ちゃん小ちゃん日記でのリアルタイムな情報発信等、学校の普段の教育活動を伝えることができ、保護者からは大変好評を得ている。また、返信カードでの保護者とのやり取りも担任と保護者との関係を深める良い手段となっている。HPの活用は、学級通信以外にも学習プリントをアップするなど幅広い活用ができています。新入生については、定員を満たすことはできなかったが、開かれた学校づくりを目指した広報活動は積極的に情報発信ができています。</p>		
次 年 度 へ の 改 善 点		
<p>① 初期対応も含め、これまでの問題を全体に蓄積・共有するために教員研修等で、より学校として確立された組織対応に努めていきたい。</p> <p>② 1年生から6年生まで系統性のある学舎・学習旅行にするために、それらを教員全体で共有できる機会や環境をつくるのが課題である。</p> <p>③ 各種の通信について、HPの更新や発行数等、係や学年での意思統一をもつ必要がある。</p>		
<p>2. 学習指導・研修の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 附属幼稚園と連携を通じて保育内容と小学校のカリキュラムのつながりを明確にし、本校独自の幼小一貫教育を確立する。 ○ 問題解決学習を基盤とした授業をすすめ、ICT教育の推進を図るとともに、子供たちが意欲的に学ぶことのできる学習環境を充実させる。 ○ 近畿大学学園の教員として高い規範意識と職責をもち、教員一人一人が本校で果たすべき役割を自覚できるよう、各種研修を充実させる。 		

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
①幼小一貫教育の確立	幼稚園の研究保育への参加、交流授業の実践、幼小一貫カリキュラムの作成	B
②学習環境の充実	活用を重視した問題解決学習の実践、壁面掲示の充実、タブレットを使った授業の実践、各教科等の特性を生かした学習機会の充実	B
③近小の教員としての教員研修	コンプライアンス研修、学年主任研修、ICT研修、新任者研修、西私小連研修など各種研修への参加と伝達研修の実施	A

結果と分析

- ① 幼小連携は進んでいる。カリキュラムの検討も具体的に進展した。幼稚園の研究保育を参観することもできた。授業を通しての交流は互いの刺激となっている。一貫教育の意識も浸透しつつあり、各教科や行事の中で反映されている。今後さらに、教員の共通理解を図っていく必要がある。
- ② 音楽・図工・体育などで教科の特性を生かした取り組みが行われている。フロアでの壁面掲示が充実しているが、各教科で学んだ内容を掲示することが未だ十分ではない。日頃の学習活動を反映した構造的な壁面掲示について、学校全体として取り組みを進めていく必要がある。
また、タブレットを使った授業実践も進んでいる。発表に活用したり、資料の配付が簡素化できたりと、授業の効率化を図ることができるようになってきている。しかしながら、低学年でのタブレットの使用が難しいのが現状である。具体的な活用の仕方がなかなか見えてこない。教材提示や調べ学習にとどまり、ロイロノートでは、まとめる力をつけていくことが難しい。タブレットやプロジェクターの台数に限りがあり、十分に活用を図っているとはいえない。異学年交流の中でタブレットを使えないか模索したり、先行教員による効果的な使い方について授業研究を進めていったりする必要がある。
- ③ 定期的にICT研修を実施することができた。実際にタブレットを使った授業など、より実践に即した研修の場が必要である。さらに、学級経営や国語・算数・体育などの研修も充実させる必要がある。学年・教科を単位とした研修の場も必要である。
保護者対応や授業について、些細な相談内容を共有する場も必要であるが、保護者対応についてのロールプレイなど、実際に即した研修を実施し、具体について一つ一つ確認することはできた。
若手教員への研修機会が十分ではないためか、「近小教育」の具体像が明確ではない。チームで授業を作り上げていく過程を実際に見るなどすることができる研修の在り方を追究していくことが必要である。負担の少ない範囲で内容の濃い研修が行われたが、回数を増やす必要がある。
伝達研修については、焦点化するなど、精選を図る必要がある。

次年度への改善点

- ① 幼小一貫カリキュラムの作成に向け、幼小合同研修や交流授業を増やしたり、幼児教育そのものについて学ぶ機会を持ったりするなど、具体的な取り組みを進めていく必要がある。ただし、無理な先取りの陥らないよう、十分に留意する必要がある。研究保育に参加しやすくなるように時間割を配慮したり、気軽に交流を図ることができるような環境作りを進めていったりすることも必要である。幼稚園からの積極的な発信も求めていく必要がある。
- ② 教科の特性とタブレットの有効な活用方法について追究していく必要がある。6年生の修了時にどんな力が身に付いているのか具体的な目標を定め、それに基づき、各学年に応じた適切な使用方法を追究していく必要がある。併せて、研究授業を進めていく中で、活用の仕方について明らかにしていく必要がある。そのための、ICT機器を活用した具体的な実践の構築を図っていく。
- ③ ICT研修は、②のとおり、具体的な実践の構築を図る中で、具体的に学ぶことができるように、ICTに重点を置きつつも、各教科の授業研究を定期的にも実施していく必要がある。保護者対応については、今後とも、具体的な事例に則して研修を推進していく必要がある。自校教育として、「近小らしさ」を全体で共通理解できるように研修計画を立て、計画的に進めていく必要がある。

3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点

(1) 目標

- 規範意識を育成し、高めていくための目標を設定し、学校全体で徹底した指導を行う。
- 子供たち自らが諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。また、異年齢交流を深め集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる。

- 体育的行事を通して、安全な行動や規律ある集団行動を体得し、運動に親しむ態度を育てるとともに、体力の向上を図る。
- ビオトープの活用に向けて組織的な取り組みを推進する。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 生活指導と安全	全教員による年間指導目標の徹底指導 「挨拶」「身だしなみ」「登下校マナー」 避難・防犯訓練等の計画的な実施と内容の充実	B
② 児童活動	委員会活動の見直し、学級会の充実 実行委員会による集会等の企画・運営 自主的なたてわり活動や附属幼稚園との活動（なかよし活動）	B
③ 保健衛生と体育	体育的行事の計画的な実施と内容の充実、今後の見直し 怪我防止や熱中症、感染症などの予防と対策	A
④ 環境整備	淡水魚、水生昆虫を主とした、新しいビオトープへの取り組み	A

結果と分析

- ① 年間目標を立てて、朝礼や放送等で確認することで、児童への意識を高めることができ、指導の徹底を図ることができた。本校独自の避難・防犯訓練を工夫して実施し、今後の訓練体系を確立していく手立てとなった。
- ② 委員会活動を見直し、適切な人数で活動を行うことができた。フロアの特徴を生かし、たてわり活動に広げることができた。また、附属幼稚園との交流も計画的に行うことができた。
- ③ 水泳学習や運動会、耐寒登山等、計画的に行事の運営を進めることができた。運動場の使い方を工夫し、怪我防止に努めることができた。
- ④ 近小アクアリウムが整備され、子供たちは生物に興味や関心を持ち、観察できる場となっている。

次年度への改善点

- ① 登下校マナーについては、まだまだ課題が多いのが現状である。児童の安全とマナーの向上を目指し、学校全体として取り組むべく具体的な方法を追究していく必要がある。
- ② それぞれの活動を全体化し、各委員会との連携や学級会の充実を図る必要がある。また、児童が主体的に活動できるよう、さらなる工夫が必要である。
- ③ 体力の向上を図る活動を工夫し、季節等も考慮しながら、怪我防止の取り組みを進めていく必要がある。
- ④ ビオトープやその周辺の活用方法を再検討し、環境づくりやルールづくりを進めていく必要がある。

4. 進路指導・学習評価の重点

(1) 目標

- 個々の学力推移を的確に把握し、進路に対する保護者の意向や子供の思いを尊重しながら進路指導を進めていく。
- 何事にも元気に真面目に頑張る態度を身に付けさせ、附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける人物を育成していく。
- 卒業生の進路追認を進めていくとともに、人材バンクの活用を図る。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 適切な進路指導	個々の状況に応じた支援と高学年における進路指導の充実	A
② 進路保障(内部進学)	新たな内部推薦制度の確立と近小ゼミの再構築	A
③ 保健衛生と体育	卒業生NW委員会と連携した、卒業生の進路追認ならびに人材バンクの構築と活用	A

結 果 と 分 析

- ① 個々の学習状況の把握に努め、必要に応じて補充学習を取り入れ、効果を上げることができた。また、3学期に行った「学力考査」においては、学年全体から見た個々の学習状況の分析を行い、課題のある児童への指導の方向性を指し示すことができた。今後も、より効果的な支援を進めていき、確実に基礎学力の定着を図るようにする。
進路学習においては、4年生以上で積極的に進めることができた。その結果、自分の進路を改めて見つめ直すよい機会となった。
- ② 努力評定を取り入れた内部推薦制度を運用し、内部推薦者37名を決定した。次年度からの新たな制度の運用に向けて、評価基準等の精査ならび児童指導規定をもとにした判定基準を構築していく。
ゼミ指導においては、保護者説明会を開催し、ゼミの主旨・学校での学習姿勢・家庭学習の大切さについて伝えてきた。また、新たな内部推薦制度に鑑み、ゼミ指導の内容や指導の形態についても大きく変更を加えた。今後は、ゼミ指導内容を通常授業に組み込んでいくことができないか検証していく。
- ③ 同窓会と連携しながら進路追認における情報収集を進めることができた。人材バンクの活用として、主に高学年を対象に卒業生による講話を計画・実施し、進路学習の充実を図ることができた。
今後も、卒業生による進路学習を充実させていく。

次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 学力面においては、より効果的な支援を進めていき、確実に基礎学力の定着を図ることができるようにする。また、進路学習においては、さらなる充実を図る。
- ② 第一基準となる努力目標の評価基準等の精査をしていくとともに、小学校で全て完結することができる新たな進路保障を構築していく。同時に、近小ゼミの内容ならびに携帯について検討していく。
- ③ 本校の進路指導の方針の再確認ならびに児童・保護者への発信を積極的に進めていく。

(2) 児童アンケートの考察

児童へのアンケートとして、「ふりかえりシート」を実施したところ、この1年間、様々な活動や体験を通して「一所懸命頑張った」「頑張ってきたので、こんなことができるようになった」といった肯定的な自己評価が多く、児童が学校生活を謳歌している姿が読み取れた。また、学校行事への関心の高さ、充実感もうかがえた。少数意見であるとはいえ、否定的な意見も見られたので、謙虚に受け止め、さらなる教育活動の充実に活かせるよう、取り組みを進めていく必要がある。

(3) 保護者アンケートの考察

1年間を振り返り、子供の成長を喜んでおられる意見を多数いただいた。併せて、担任等の対応に対する労いの言葉も多くいただいた。概ね、本校の教育活動について肯定的な意見が大多数を占めていた。それらの意見に甘受することなく、一部であるとはいえ、厳しい意見も見られたので、真摯に受け止め、来年度の教育活動に活かしていく所存である。

尚、各項目別の内容ならびに改善を図るべく方向性等については、次の通りである。

－学校方針について－

学校方針・教育方針については、従前同様、叡智教育・道徳教育・健康教育の調和のとれた教育活動の充実に努める。今後も、本校の伝統を引き続きながら、時代のニーズに的確に応えられるよう教職員一丸となり取り組みを進めていく。また、近畿大学学園の附属校として、幼・小一貫教育ならびに、中学校・高等学校、大学との連携を一層深め、より充実した教育を推進していく。そのため、校内にとどまらず、校外学習や体験学習を積極的に取り入れ教育の質の向上を目指す。

－新学習指導要領の改訂を見据えて－

平成30年度末を目途として、カリキュラムマネジメントの視点から、本校のシラバスの全面改定を進める。

主体的、対話的で、深い学びが実現できるように教員研修を進めていく。特に、ICT教

育のさらなる充実を図る。

英語教育、道徳については、教科化に向けて、指導時間、指導内容について検討をさらに加えるとともに、カリキュラムの改善に努める。

－学校行事について－

学舎・学習旅行の行き先、内容については、マネジメントサイクルに則り、今後も見直し、検討を進め、一層充実した学舎・学習旅行になるよう改善に努める。

－生活指導について－

今年度、「あいさつ」「身だしなみ」「乗車マナーを含む公共マナー」を重点として、取り組みを進めてきた。各ご家庭のご理解ご協力を得ながら、今後も継続してマナー向上の取り組みを進めていく。また、校内ルールの確立・徹底を図り、元気よくあいさつできる「近小生」の育成を目指した取り組みを進めていく。

－安全指導・防災対策について－

携帯電話の学校への持ち込みについては、現行どおり、原則禁止とする。但し、メールや通話機能のないGPS端末に限り、学校の許可の下、持ち込みを可とする。学校外における携帯情報端末の使用に関しては、各家庭と連携し、特段のご配慮をお願いする。また、防災訓練については、様々な状況を想定し、児童が実際の災害に際して、主体的に活かせるものとなるよう改善を進めていく。

－ケータリング給食について－

今年度より、業者を変更するとともに、回数も増やし、週3回のケータリング給食を、学期毎の選択制を取り入れ実施してきた。今後さらに、児童が楽しみにするようなケータリング給食を目指して、内容や回数はもとより、改善を図っていく。

－放課後について－

低学年では、外部業者に委託し、放課後の学童保育を取り入れている。高学年では、教員の指導による習熟度別のグループ編成での「近小ゼミ」や「ステップUP学習」(ICT教育)を実施している。併せて、外部業者に委託し、サッカー、バスケットボール、器械体操、英会話、新体操等の活動を取り入れ、放課後の課外活動の充実を努めている。また、短時間であるとは言え、放課後の校庭開放も実施し、友達と共に活動する時間の確保に努めている。

今後とも継続して、子供たちが充実した学校生活を過ごすことができるようにしていく。

－進路・進学について－

進路・進学についての情報の開示を一層進めていくとともに、進路説明会の充実を図っていくことで、より適切な進路・進学の実現を目指した取り組みを進めていく。併せて、附属中学校への内部進学については、平常の授業態度等を重視し、附属中学校で活躍することができる力を身に付けた児童を推薦する基準を設定し、附属中学校への幅広い進路を保障する。

－保教会活動について－

保教会活動の負担軽減と内容の充実を図るため、行事等の精選をさらに進めていく。併せて、保教会役員・委員の負担が過剰とならないように、継続して協議を進めていく。

－学級や授業の雰囲気について－

各教員の指導力の向上を目指し、教員研修の充実を図るとともに、各学級がそれぞれ連携することで、学年としての教育活動の充実を図る。さらに、各フロア毎の連携を一層深めていく。また、ホームページ等を活用して、学校生活の様子をより詳しく開示していく。

(4) 保教会運営委員アンケートの考察

毎月実施される運営委員会での各教員の話から、子供たちへの熱意や一貫した教育方針が垣間見られ、非常に参考になった。感謝を伝える手紙のやりとりなど、情操教育にも力を入れていることについては、さらに充実させてほしい。

ただ、残念なことは、保護者の一部の方の言動や行動が気になることである。保護者の資質向上が必要である。

4. 学校関係者評価について

(1) 教職員による評価の結果について

本校の教育活動について全般的に高評価を得ることができた。しかしながら、課題として、幼小一環教育の確立や学習環境の整備および、生活指導や児童活動については、一層の充実を図るべく、取り組みを進めていくようにとの提言を受けた。

(2) 児童によるアンケート結果について

肯定的な自己評価が多いことについて、高い評価をいただいた。今後とも、引き続き、教育の質の向上を目指した取り組みを推進していくことを望むとの提言を受けた。

(3) 保護者によるアンケート結果について

少数意見であるとはいえ、学校に対する厳しい意見があることをふまえ、批判に対して謙虚に耳を傾けると同時に、速やかに改善を図るようとの提言を受けた。

(4) 保教会運営委員によるアンケート結果について

多くのコメントが寄せられていることから、保教会活動が営々と展開され、教育活動に寄与していることが称賛された。今後とも、行事の負担軽減や精選等、時代に応じた保教会活動が展開できるように支援するようとの提言を受けた。

(5) 総括

以上、本年度の教育活動についての賛同を得た。引き続き、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼稚園との一貫教育を見据えた教育活動を展開するとともに、附属中学校・高等学校、大学との連携を深めていくことで、私学としての質の高い教育を保証し、児童や保護者の信頼や期待に応えるようとの提言を受けた。

そこで、来年度は、次の5点を具体的方策として掲げ、教育活動を推進していくことを提案し、了承が得られた。

- 近小の英語教育の確立
- 高学年の生活指導の在り方
- 附属中学校への内部推薦制度の確立
- ICT教育の推進
- チーム学校としての取り組みの推進

